



校長だより(職員編)

呉市立市阿賀小学校
安宗 誠

今こそ、「本質的な問い」のもてる子供に!

「学びの変革」のさらなる推進のため、単元計画の構想に当たっては、「本質的な問い」「単元を貫く問い」「個別の問い」のそれぞれ3つの問いを設定できることが重要であると言われています。

そもそも、それぞれの「問い」とはどういったもの?

- 「本質的な問い」とは・・・何度も問い直され答えが更新され続ける「問い」のこと
- 「単元を貫く問い」とは・・・単元を通して考え深めていく「問い」のこと
- 「個別の問い」とは・・・単元を構成する授業内で身に付ける知識・技能等のこと

仮に国語の授業で文学的文章を学ぶという設定を例にあげるとすると、それぞれの「問い」は次のようなイメージになるのではないのでしょうか。

- 「本質的な問い」の例・・・「なぜ、文学的文章を学ぶのか?」「文学的文章を学ぶことによって得られることは何か?」・・・。
- 「単元を貫く問い」の例・・・「この作品が私たち学習者に伝えようとしていることは何か?」
- 「個別の問い」の例・・・「単元を貫く問い」を明らかにする上での知識・技能、作者の技法的なこと等。

こういう作業を経ることで、授業のねらい(学習課題)もより明確になったり、より主体的で深い学びにつながったりといったことになるのでしょう。

ところで、「本質的な問い」は、「学びの変革」推進のキーワードではあるものの、考えてみれば、日々「よりよく生きる」ということが、「本質的な問い」を自らもち、それを解決していくとする営みに他ならないですね。

例えば、毎日学校に通うということに対して、それは当たり前のことだから、不思議にも感じないというのではなく、「そもそも、なぜ、学校に通わなければならないのか?」という「本質的な問い」が自然と湧いてきて、それに対する本質的な答えを見出そうとする。そして、見出したその答えに真摯に向き合おうとする。そういったことの連続がよりよく生きる営みなのだと思います。そういう人間を育てることが、今まさに求められているのでしょう。